

Title	ユーモアと社会心理学的変数との関連についての基礎的研究
Author(s)	谷, 忠邦; 大坊, 郁夫
Citation	対人社会心理学研究. 2008, 8, p. 129-137
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/4082
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

ユーモアと社会心理学的変数との関連についての基礎的研究

谷 忠邦(大阪大学大学院人間科学研究科)

大坊郁夫(大阪大学大学院人間科学研究科)

本研究では、従来のユーモア研究を整理し作成されたユーモア尺度を用い、ユーモアと社会心理学的変数の関連性についての基礎的な資料を提出することを目的とする。大学生を対象として、ユーモア・センス、ユーモア行動、社会的スキル、精神的健康、外向性、情緒不安定性、ユーモアがあると思う友人、ユーモアがないと思う友人への満足度と影響の強さに回答する質問紙調査を行った。その結果、ユーモアが社会的スキルやパーソナリティ特性と関連していることが示された。また、他者を支援するユーモアを表出する人は、ユーモアのない友人よりもユーモアのある友人に対する満足感が有意に高いことが示唆された。この傾向は、影響の強さにおいても同様であった。最後に、結果の詳細な検討の必要性及び本研究の今後の展開が議論された。

キーワード: ユーモア、社会的スキル、精神的健康、友人関係、地域比較

問題

古代ギリシア時代の Plato から現代にいたるまで、ユーモアに関して様々な議論がなされているが、定義や分類、对人的効果及び社会的効果について研究者の間で見解が一致しているとはいえない。ユーモアを測定する尺度に関しても、気質や気分で測定するものから、行動で測定するもの、ユーモアを能力と位置づけて創造性と敏捷性を測定するものまで幅広く、それぞれの尺度が扱うユーモアの領域が重複していたり、逆に補いきれていなかったりしている。同一の概念との関連を検討する際、異なった領域を測定するユーモア尺度を使用するため、従来の研究において一貫した結果がみられなかったと考えられる。本研究では、現在までのユーモア研究及び尺度を概観・統合し、それらをユーモア表出の動機の観点から整理した上野(1992)の分類を用い、ユーモアと社会心理学的変数との関連の基礎的な資料を提出する。

ユーモアの定義及び分類

上野(1992)は、ユーモアを「おもしろさ、おかしさという心的現象を示すもの」、ユーモア刺激を「ユーモアを引き起こす個々の刺激事象」、ユーモア表出を「ユーモア刺激を表出すること」、ユーモア感知を「ユーモア刺激を感知すること」とそれぞれ定義した上で、ユーモアに関する研究を概観し、ユーモアの分類を行った。上野(1992)によると、他者の欠陥や失敗を嘲笑し、優越感を感じることでユーモアを感じるという優越感情理論(superiority theory)、関連がないと思われる思考や概念が意外な方法で結びつくことでユーモアが生じるといふ不適合理論(incongruity theory)など6つのユーモアに関する研究や尺度はユーモア表出の動機づけという点から遊戯的ユーモア、攻撃的ユーモア、支援的ユーモアの3つに分類される。遊戯的ユーモアは、陽気な

気分、雰囲気醸し出し、自己や他者を楽しませることを動機づけとして表出されるユーモア刺激によって生じられるユーモアである。また、攻撃的ユーモアは、他者攻撃を動機づけとして表出されるユーモア刺激によって生じられるユーモアである。支援的ユーモアは、自己や他者を励まし、勇気づけ、許し、心を落ち着けさせることを動機づけとして表出されるユーモア刺激によって引き起こされるユーモアである。ただし、この分類ではユーモア刺激の対象や生起のタイミングが示されておらず、ユーモアの生起が自分でも良いのか、また自分がユーモア刺激を表出する際にユーモアは生起しているのかという問題がある。

上野(1993)はどのようなユーモアを好み、楽しみ、表出するかといった態度をユーモアに対する態度と定義し、その多面性を実証的に捉える研究を行った。その結果、遊戯的ユーモア志向と攻撃的ユーモア志向の2側面が示された。遊戯的ユーモア志向は、「遊戯的なユーモアやユーモア刺激に対する好みや行動、そしてこれらのユーモア刺激の表出や感知のためある積極的な笑いを引き起こすことに関する」態度である。また攻撃的ユーモア志向は、「ユーモアやユーモア刺激の中でも攻撃性を含むものに関する」態度である。しかしながら、支援的ユーモアに関する態度は示されなかった。

牧野(1997)はこの原因を、調査項目におけるユーモア刺激が2種類しか含まれていなかったからであるとしており、さらに、ユーモアの表出や感知によるおもしろさの生起や楽しさが状況に応じて自己や他者に支援的な機能を持つと考えるのが妥当であるとしている。そこで、牧野(1997)は上野(1992)のユーモアの3分類を改めて整理し、ユーモアを、ユーモア刺激の性質(遊戯的・攻撃的)と支援的機能(あり・なし)の2次元で捉え、ユーモアを「送り手が受け手(ときには、送り手自身も含む)を楽

しませるため作り出した刺激を受け手に伝達し、当事者(送り手かつ/あるいは受け手)がその刺激をおもしろい、おかしいと知覚する一連の過程」と定義している。牧野(1997)は、日常生活におけるユーモアの効果を考慮した場合、対人コミュニケーションによるユーモアの効果が顕著に観察され、実際に「(ユーモアを)使う、用いる、(人)を笑わせる、～して笑う、～をおもしろがる、～(ユーモア)を楽しむ」という行動レベルで捉える必要があると主張した。

牧野(1998)は既存のいくつかのユーモア・センス尺度を取り上げ、ユーモアが単一概念として用いられていることを指摘し、上野(1993)や牧野(1997)で示されたようなユーモア刺激の種類に対応したユーモア・センス尺度の作成を行った。その結果、攻撃的ユーモア・センスと遊戯的ユーモア・センスの2つの側面が示された。

社会的スキル、well-beingとの関連

ユーモアがコミュニケーションに笑いや楽しさをもたらすことで、コミュニケーションを円滑にすることを日常、われわれは経験している。Yip & Martin(2006)は、個人のwell-beingに有益か否かに焦点化されて作成されたユーモア・スタイル質問紙(Humor Styles Questionnaire: Martin Puhlik-Doris, Larson, & Gray, 2003)と対人的能力質問紙(Interpersonal Competence Questionnaire: Buhmester, Furman, Wittenberg, & Reis, 1988)を用い、支援的ユーモアと自己向上ユーモアが関係の開始、個人的な開示のコンピテンスと正の関連があることを示した。さらに、攻撃的ユーモアは他者への感情的サポート、葛藤マネジメントと負の関連があり、自己卑下ユーモアは権利の主張と負の関連があることを示した。また、精神的well-beingに関しては、ユーモアの有効性が先行研究において指摘されている。コントロールが不可能であったり、対処が困難であったりするような状況において、悲観的視点からユーモアの視点に移動することで問題から距離をとらせ、深刻に捉えるのを弱め、ストレスをより少なく経験させるのではないかと提案されている。例えば、ユーモアをよく使っている人ほどストレスフルな出来事が多いときでも心理的に安定していることが明らかされており、特に抑うつ感を減らすのにユーモアが役立つことが示されている(Nezu, Nezu, & Blissett, 1988; Thorson & Powell, 1994)。加えて、状態不安を感じさせなくすることも明らかになっている(Abel, 1998)。

しかし、Martin et al.(2003)の分類はあくまで個人のwell-beingに潜在的に有益か否かに焦点化したものであり、幅広くユーモアと社会的スキルとの関連を検討したものであるとは言えない。また、ユーモアについての海外における知見が、文化的差異の存在する国内に直

接適用できるかどうかは定かではない。そこで、国内におけるユーモアを検証した尺度によって、社会的スキル及び精神的健康とユーモアの関連を調べる。

ユーモアにおける性差

性別がユーモアに影響することが知られている。上野(1996)によると、男性は女性よりも異性を笑わせたいという意識が強く、「笑わせなければいけない」という意識を持っていることが報告されている。また、Foot & Chapman(1976)は、7～8歳の子どもの対象にした調査において、女の子の方が男の子と比べてよく笑うことに意識を向けている可能性があることを示唆している。このことから、ユーモア・センス、さらにユーモアの表出や感知にも違いがみられると考えられる。

しかし、使用するユーモアの違いなどの研究が多く、ユーモアと性差に関する研究はあまり行われていない。数少ない研究として、上野(1996)は、高校生の男性と女性の両性を対象に、好ましい異性のパーソナリティの調査を行い、「ユーモアのある」が男性において20位中の6位、女性においては3位という比較的上位に位置付けられていることを指摘している。しかし、実際にユーモアがあることが友人関係にどのような影響を及ぼしているかを調べたものはない。本研究では、RCI(Berscheid, Snyder, & Omoto, 1989)を参考に、関係満足度と影響の強さという2つの指標を使用し、ユーモアと友人との対人関係における性差を検討する。

パーソナリティとの関連

内向性—外向性の軸で表される社会性と情動的—不安定の軸で表される情動性が、ユーモアとそれぞれ関連することが指摘されている(Ziv, 1984)。Ziv(1984)は、パーソナリティの基本となる基本的な社会性の高低と情動性の高低との組み合わせ4タイプによって、ユーモアの好み異なることをみている。Ziv(1984)によると、情動的で外向的な人は攻撃的で所属意識を高める民族ジョーク(ethnic joke)を好み、情動的で内向的な人はユーモアを楽しむことがあまり多くなく、不安を解消するような軽いブラック・ジョークのようなものを好むとしている。また、情動の安定した外向的な人は集団の潤滑油となるようなユーモアや知的ユーモアを好み、情動の安定した内向的な人は不適合に代表されるような知的ユーモアを好み、その解決を楽しむ人であるとしている。このことから、ユーモア・センスと社会性、情動性が関連することが考えられる。しかしながら、Ziv(1984)では、パーソナリティ特性とユーモアとの実証的研究は行われていない。本研究では、社会性と情動性の2つの基本的なパーソナリティ特性がユーモア・センスと実際に関連しているかを検討する。

関西と関東におけるユーモアの違い

関東と関西のユーモアに関する比較において、関西への居住年数が多い人の方が心理的距離のある他者に対してより表出を行うということが明らかになっている(宮戸・上野, 1995)。また、同じ調査において関西の方が、「ボケ」と「ツッコミ」の役割分担で「笑い」を生んでいるということも指摘されている。さらに、井上(1984)では、商人文化である大阪と武士文化であった東京を中心に、関東と関西では笑いやユーモアが異なり、関西の方が笑いを協調のために使用し、関東では逆に抑制されてきたとされている。しかしながら、ユーモアを表出することの積極性に関して、関東と関西で違いはみられない(宮戸・上野, 1995)。このことは心理学的な知見と文化学的な知見が異なっていることを示す。そこで、本研究では、実際のユーモア・センスは、今までに関西への居住年数が多い人と関東への居住年数が多い人で異なるかどうかを検討する。

方法

調査対象者と手続き

調査対象者は、関西の2つの大学の大学生($n = 202$)、関東の1つの大学の大学生($n = 148$)の357名(男性153名、女性197名、不明7名)。年齢の平均値は20.0歳($SD = 1.4$, $range = 18.0 \sim 25.5$)であった。質問紙調査は授業中に集団実施で行われた。

調査時期

2007年6月下旬～7月中旬。

質問紙の構成

基本属性として調査対象者の生年月、性別、今まで一番長く住んだ都道府県と住んだ期間(年数と月数)をたずねた。

ユーモア表出行動 牧野(1997)の作成した9項目からなるユーモア表出行動尺度に「あてはまらない」から「あてはまる」までの5段階評定を求めた(1～5点)。逆転項目について考慮し、得点は、①「攻撃的ユーモア表出行動」(4項目)、②「支援的ユーモア表出行動」(3項目)、③「遊戯的ユーモア表出行動」(2項目)の各下位尺度得点を算出した。

ユーモア感知行動 牧野(1997)の作成した7項目からなるユーモア感知行動尺度に「あてはまらない」から「あてはまる」までの5段階評定を求めた(1～5点)。逆転項目について考慮し、得点は、①「攻撃的ユーモア感知行動」(3項目)、②「支援的ユーモア感知行動」(2項目)、③「遊戯的ユーモア感知行動」(2項目)の各下位尺度得点を算出した。

ユーモア・センス 牧野(1998)の作成した10項目からなるユーモア・センス尺度に、それぞれに「全くあてはまらない」から「非常にあてはまる」までの7段階評定回

答を求めた(1～7点)。逆転項目について考慮し、得点は、①「攻撃的ユーモア・センス」、②「遊戯的ユーモア・センス」(各5項目)の各下位尺度得点を算出した。①「攻撃的ユーモア・センス」は、ユーモアの中でも、他者をからかう、皮肉を言うなど攻撃性を含むユーモアを表出、あるいは感知する能力を測定する。②「遊戯的ユーモア・センス」は、ユーモアの中でも他者攻撃を含まない素朴なユーモア、しゃれや言葉遊びなどの事象の不適合・ズレ、意外な一致などによりユーモアを感じたり、表出したりする能力を測定する。

情緒不安定性と外向性 Big Five(和田, 1996)から、外向性と情緒不安定性を測定する24項目を用いた(1～7点)。外向性(12項目)と情緒不安定性(12項目)の各下位尺度得点を算出。

社会的スキル 菊池(1988)の作成した18項目からなるKiSS-18尺度を用いた(1～5点)。

精神的健康 中川・大坊(1996)のGHQ28を用いた(GHQ28採点法)。GHQ28は得点が高いほど精神的な不健康を示す。

ユーモア・センスのあると思う友人への満足度と友人からの影響の強さ RCI(Berscheid et al., 1989)を参考に①影響の強さについては「まったく与えない」から「非常に与える」まで(1～7点)、②満足度についても同様に「全く満足していない」から「非常に満足している」までの7段階評定を求めた。友人への満足度(2項目)と友人からの影響度(2項目)の各下位尺度得点を算出した。

ユーモア・センスのないと思う友人への満足度と友人からの影響の強さ ユーモア・センスのあると思う友人についての内容と同様の項目を用いた。

結果

信頼性の確認

ユーモア・センス尺度とユーモア行動尺度に関して、信頼性が十分に確認されていないので、尺度の信頼性を確かめるためCronbachの α 係数を算出した。その結果、遊戯的ユーモア表出行動と遊戯的ユーモア感知行動において内的一貫性が確認されなかった(表出: $\alpha = .22$, 感知: $\alpha = .38$)ため、ここでは使用しない。その他の尺度に関しては内定一貫性があり、変数として用いても問題がないと判断したため、平均値を算出した。 α 係数、平均値と標準偏差はTable 1に示した。

ユーモア尺度と各変数の相関関係

各ユーモア尺度と変数間のそれぞれの関連性を見るために、ユーモアの下位尺度と各変数間のPearsonの相関係数を算出した(Table 2)。その結果、攻撃的ユーモア・センスは情緒不安定性と有意な弱い正の相関関係がみられ、遊戯的ユーモア・センスは外向性、社会的

Table 1 ユーモア下位尺度の α 係数、平均値と標準偏差

	α	M	SD
攻撃的ユーモア・センス	.87	20.29	6.38
遊戯的ユーモア・センス	.67	25.78	3.84
攻撃的ユーモア表出行動	.81	3.29	0.96
支援的ユーモア表出行動	.72	3.91	0.80
攻撃的ユーモア感知行動	.69	3.18	0.93
支援的ユーモア感知行動	.56	3.46	0.91

スキルの中に有意な正の相関関係がみられた。また、関係満足感や影響の強さと相関関係はほぼみられなかったが、ユーモアがあると思う友人からの影響の強さと弱い正の相関関係の傾向がみられた。攻撃的ユーモア表出行動は、情緒不安定性、精神的不健康との間に弱い有意な相関関係がみられた。また、支援的ユーモア表出行動は、外向性、情緒不安定性、社会的スキル、精神的健康、ユーモアがあると思う友人への満足度、ユーモアがあると思う友人からの影響の強さとの間に有意な正の相関関係がみられた。最後に、支援的ユーモア感知行動は、外向性との間に有意な正の相関関係、情緒不安定性との間に有意な負の相関関係、社会的スキルとやや強い有意な正の相関関係がみられた。

ユーモア表出行動と精神的健康

ユーモア・センスと精神的健康との相関関係はみられなかった。そのため、相関関係がみられた攻撃的ユーモア表出行動および支援的ユーモア表出行動と、精神的健康との関連に焦点をあて、研究を行う。

攻撃的ユーモア表出行動が精神的健康に与える影響について明らかにするため、攻撃的ユーモア表出行動を 3 水準とし、得点の比較を行った。各群の GHQ28 の平均値は、低群 7.72($SD = 6.11, n = 125$)、中群 8.42($SD = 6.31, n = 84$)、高群 9.62($SD = 6.41, n = 148$)となった。分散分析の結果、3 群間の平均値の差は有意となった($F(2, 349) = 3.17, p < .05$)。Tukey の HSD 検定を用いた多重比較の結果(以降、多重比較を行う際はこの方法を用いた)、低群と高群の間に有意な

差があり、高群の方が低群よりも精神的健康が悪いことが示された($p < .05$)。同様に、支援的ユーモア表出行動についても得点の比較を行った。各群の GHQ28 の平均値は、低群 7.25($SD = 5.70, n = 96$)、中群 8.91($SD = 6.51, n = 173$)、高群 9.80($SD = 6.39, n = 86$)となった。分散分析の結果、3 群間の平均値の差は有意となった($F(2, 349) = 3.97, p < .05$)。多重比較の結果、低群と高群の間に有意な差があり、高群の方が低群よりも精神的健康が悪いことが示された($p < .05$)。

支援的ユーモア表出行動と満足度・影響の強さ

支援的ユーモア表出行動と友人関係との関連性を明らかにするため、支援的ユーモア表出行動の各群(低群・中群・高群)を参加者間要因、友人への関係満足度(ユーモアがあると思う友人・ユーモアがないと思う友人)を参加者内要因とする 2 元配置の分散分析を行った。その結果、支援的ユーモア表出行動の各群と友人への関係満足度の間に交互作用がみられた($F(2, 354) = 4.28, p < .05$)。支援的ユーモア表出行動の単純主効果と関係満足度の単純主効果を調べたところ、支援的ユーモア表出行動の単純主効果が低群($F(1, 354) = 83.67, p < .001$)、中群($F(1, 354) = 92.12, p < .001$)、高群($F(1, 354) = 167.24, p < .001$)のいずれについても有意となった。

同様に支援的ユーモア表出行動と友人からの影響の強さについても分析を行った。その結果、支援的ユーモア表出行動の各群と友人からの影響の強さの間に交互作用がみられた($F(2, 352) = 4.02, p < .05$)。支援的ユーモア表出行動の単純主効果と友人からの影響の強さの単純主効果を調べたところ、支援的ユーモア表出行動の単純主効果が低群($F(1, 352) = 54.39, p < .001$)、中群($F(1, 352) = 67.72, p < .001$)、高群($F(1, 352) = 125.35, p < .001$)のいずれについても有意となった。したがって、いずれの群でも、ユーモアがあると思っている友人からの満足度と影響の強さがユーモアがないと思っている友人からの満足度と影響の強さよりも高いことが示された。

Table 2 ユーモアの下位尺度と各変数の相関関係

	外向性	情緒不安	社会的スキル	精神的不健康	ユーモアあり満足度	ユーモアあり影響	ユーモアなし満足度	ユーモアなし影響
攻撃的ユーモア・センス	.08	.13 *	.00	.06	-.02	.00	-.03	-.02
遊戯的ユーモア・センス	.29 ***	.05	.19 ***	.05	.07	.09 †	-.02	.04
攻撃的ユーモア表出行動	.01	.12 *	.00	.16 ***	.01	.00	-.01	.02
支援的ユーモア表出行動	.34 ***	.12 *	.22 ***	.14 ***	.12 *	.12 *	-.05	-.04
攻撃的ユーモア感知行動	.08	.08	.00	.01	-.01	-.05	-.02	.03
支援的ユーモア感知行動	.38 ***	-.24 ***	.39 ***	-.12*	.08	.13 *	-.04	.02

*** $p < .001$ ** $p < .01$ * $p < .05$ † $p < .10$

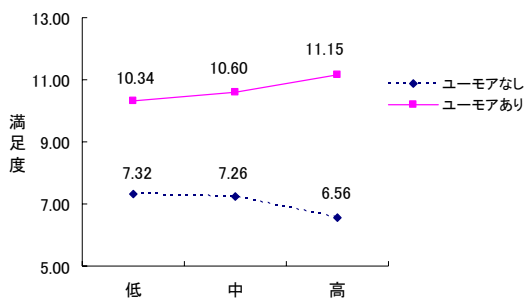


Figure 1 友人への満足度における支援的ユーモア表出行動の群間比較

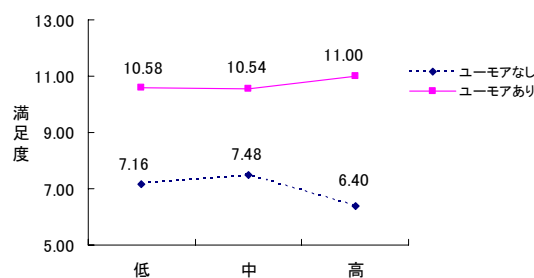


Figure 3 友人への満足度における支援的ユーモア感知行動の群間比較

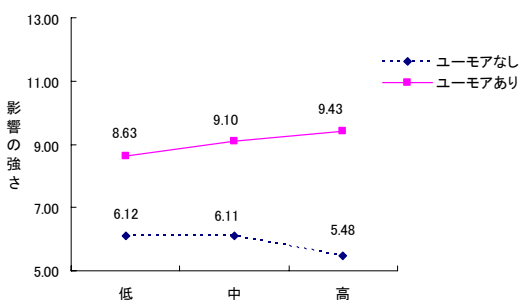


Figure 2 友人からの影響の強さにおける支援的ユーモア表出行動の群間比較

支援的ユーモア感知行動と満足度・影響の強さ

支援的ユーモア感知行動と友人関係との関連性を明らかにするため、支援的ユーモア感知行動の各群(低群・中群・高群)を参加者間要因、友人への満足度(ユーモアがあると思う友人・ユーモアがないと思う友人)を参加者内要因とする 2 元配置の分散分析を行った。その結果、支援的ユーモア感知行動の各群と友人への関係満足度の方に交互作用がみられた(Figure 3, $F(2, 351) = 5.81, p < .01$)。支援的ユーモア感知行動の単純主効果と関係満足度の単純主効果を調べたところ、支援的ユーモア表出行動の単純主効果が低群($F(1, 351) = 84.47, p < .001$)、中群($F(1, 351) = 98.27, p < .001$)、高群($F(1, 351) = 187.17, p < .001$)のいずれについても有意となった。したがって、いずれの群においても、ユーモアがあると思っている友人からの影響の強さの方が、ユーモアがないと思っている友人からの影響の強さよりも高いことが示された。

同様に、支援的ユーモア感知行動と友人からの影響の強さについても同様に 2 元配置の分散分析を行ったが、有意な交互作用はみられず、影響の強さの主効果がみられた($F(1, 351) = 245.98, p < .001$)。

ユーモア・センスにおける性差

ユーモア・センスにおいて性差がみられるかどうかを明らかにするため男女の得点の比較を行った(Table 3)。その結果、有意な差がみられ、男性の方が女性よりも攻撃的ユーモア・センスが有意に高かった。同様に遊戯的ユーモア・センスにおいても男女の得点の比較を行ったところ、女性の方が男性よりも有意に得点が高かった。

ユーモアがあると思っている友人への満足度と影響の強さの性差

友人からユーモアがあると思われることによる関係への影響について、性差が存在するかどうかを明らかにするため、男女の得点の比較を行った(Table 3)。その結果、ユーモアがあると思っている友人から影響の強さについて、男性に比べて、女性の方が有意に得点が高かった。したがって、女性の方が男性よりも、ユーモアがあると思っている友人から影響を受けていると認識していることが示された。しかしながら、満足度については有意な差がみられなかった。

ユーモアがないと思っている友人への満足度と影響の強さの性差

友人からユーモアがないと思われることが関係に及ぼす影響に性差が存在するかどうかを明らかにするため、男女の得点の比較を行った(Table 3)。その結果、ユーモアがないと思っている友人への満足度について、男性と比べて、女性の方が有意に得点が高かった。したがって、女性の方が男性よりも、ユーモアがないと思っている友人に満足感を覚えていないということが示された。しかしながら、影響の強さについては差がみられなかった。

ユーモア・センスへ今まで一番長く住んだ地域が与える影響

今まで一番長く住んだ都道府県を関西、関東、中部、その他に分類し、今までに一番長く住んだ地域が各ユーモア・センスに与える影響について検討した。攻撃的

ユーモア・センスの平均値は、関西 21.13(*SD* = 6.54, *n* = 124)、関東 19.77(*SD* = 5.88, *n* = 114)、中部 20.28(*SD* = 7.19, *n* = 47)、その他 19.57(*SD* = 6.34, *n* = 65)となった。分散分析の結果、各地域の間に有意な差はみられなかった(*F*(4, 347) = 0.97, *ns*)。同様に遊戯的ユーモア・センスについても検討した。遊戯的ユーモア・センスの平均値は、関西 25.56(*SD* = 3.92, *n* = 123)、関東 26.18(*SD* = 3.47, *n* = 114)、中部 26.21(*SD* = 4.02, *n* = 47)、その他 25.36(*SD* = 4.09, *n* = 64)となった。分散分析の結果、各地域の間に有意な差はみられなかった(*F*(4, 344) = 1.90, *ns*)。

性別とデータ取得地の遊戯的ユーモア・センスへの影響

今まで一番長く住んだ都道府県のユーモア・センスへの影響がみられなかったため、現在住んでいる地域のユーモア・センスへの影響を明らかにするため、関西圏で取得したデータと関東圏で取得したデータの得点の比較を行った(Table 4)。その結果、関西圏で取得したデータと比べて、関東圏で取得したデータの方が有意に得点が高かった。つまり、関東圏の方が近畿圏よりも遊戯的ユーモア・センスがあることが明らかとなった。しかしながら、攻撃的ユーモア・センスについては有意な差がみられなかった。

支援的ユーモア表出・感知行動と外向性

遊戯的ユーモア・センスと外向性との間には正の相関関係がみられたものの、 α 係数の値は低かった($\alpha = .29$)ので、より高い相関関係がみられた支援的ユーモア表出行動($\alpha = .34$)、支援的ユーモア感知行動($\alpha = .38$)と外向性との関連に焦点をあて、検討した。支援的ユーモア表出行動が外向性に与える影響について明らかにするため、支援的ユーモア表出行動を 3 水準(低群・中群・高群)とし、得点の比較を行った。各群の外向性の平均値は、低群 49.13(*SD* = 11.21, *n* = 96)、中群 53.82(*SD* = 11.46, *n* = 173)、高群 59.83(*SD* = 11.97, *n* = 86)となった。分散分析の結果、3 群間の平均値の差は有意となった(*F* (2, 346) = 19.29, *p*

< .001)。多重比較の結果、全て群間に有意な差がみられ、支援的ユーモア表出行動を多く取る人であるほど、外向性が高いことが明らかとなった(全て *p* < .01)。

同様に、支援的ユーモア感知行動についても得点の比較を行った。各群の外向性の平均値は、低群 49.83(*SD* = 11.50, *n* = 147)、中群 55.38(*SD* = 11.31, *n* = 128)、高群 59.60(*SD* = 11.86, *n* = 79)となった。分散分析の結果、3 群間の平均値の差は有意となった(*F*(2, 346) = 19.60, *p* < .001)。多重比較の結果、全ての群間に差がみられ、支援的ユーモア感知行動を多く取る人であるほど、外向性が高いことが明らかとなった(低 vs. 中, *p* < .01; 中 vs. 高, *p* < .05; 高 vs. 低, *p* < .01)。

支援的ユーモア感知能力と情緒不安定性

支援的ユーモア感知行動と情緒不安定性との間に負の相関関係がみられた。そこで、支援的ユーモア感知行動が情緒不安定性に与える影響について明らかにするため、支援的ユーモア感知行動を 3 水準とする得点の比較を行った。各群の情緒不安定性の平均値は、低群 59.04(*SD* = 11.86, *n* = 147)、中群 54.04(*SD* = 13.29, *n* = 128)、高群 53.15(*SD* = 15.00, *n* = 79)となった。分散分析の結果、3 群間の差は有意となった(*F* (2, 342) = 7.07, *p* < .001)。多重比較の結果、全て群間に有意な差がみられ、支援的ユーモア感知行動を多く取る人であるほど、情緒不安定性が低いことが明らかとなった(低 vs. 中, *p* < .01; 中 vs. 高, *p* < .05; 高 vs. 低, *p* < .01)。同様に、支援的ユーモア表出行動についても得点の比較を行ったが、3 群間の平均値の差は有意傾向にとどまった(*F*(2, 342) = 2.71, *p* < .10)。

支援的ユーモア感知能力と情緒不安定性

支援的ユーモア感知行動と情緒不安定性との間に負の相関関係がみられた。そこで、支援的ユーモア感知行動が情緒不安定性に与える影響について明らかにするため、支援的ユーモア感知行動を 3 水準とし、得点の比較を行った。各群の情緒不安定性の平均値は、低群 59.04(*SD* = 11.86, *n* = 147)、中群 54.04(*SD* = 13.29, *n* = 128)、高群 53.15(*SD* = 15.00, *n* = 79)となった。

Table 3 ユーモア・センス、友人への満足度、影響の強さの性差

	男性			女性			<i>t</i>	有意水準
	<i>n</i>	<i>M</i>	<i>SD</i>	<i>n</i>	<i>M</i>	<i>SD</i>		
攻撃的ユーモア・センス	151	20.55	5.98	196	19.15	6.43	3.49	***
遊戯的ユーモア・センス	149	25.14	3.98	196	26.19	3.60	-2.57	*
ユーモアありへの満足度	153	10.63	2.09	191	10.67	2.13	-0.16	<i>ns</i>
ユーモアありからの影響の強さ	153	8.67	2.54	192	9.34	2.51	-2.45	**
ユーモアなしへの満足度	145	7.52	3.30	177	6.81	2.88	2.06	*
ユーモアなしからの影響の強さ	147	6.00	3.15	178	5.79	2.90	0.62	<i>ns</i>

*** *p* < .001 ** *p* < .01 * *p* < .05

Table 4 ユーモア・センスのデータ取得地の差

	関西			関東			t	有意水準
	n	M	SD	n	M	SD		
攻撃的ユーモア・センス	202	20.26	6.44	145	20.07	5.57	0.27	ns
遊戯的ユーモア・センス	200	25.29	3.85	145	26.37	3.29	-2.63	**

** $p < .01$

分散分析の結果、3 群間の平均値の差は有意となった ($F(2, 342) = 7.07, p < .001$)。多重比較の結果、全て群間に有意な差があり、支援的ユーモア感知行動を多く取る人であるほど、情緒不安定性が低いことが明らかとなった(低 vs. 中, $p < .01$; 中 vs. 高, $p < .05$; 高 vs. 低, $p < .01$)。同様に、支援的ユーモア表出行動が情緒不安定性に与える影響について明らかにするため、支援的ユーモア表出行動を 3 水準とし、得点の比較を行った。しかしながら、3 群間の平均値の差は有意傾向にとどまった ($F(2, 342) = 2.71, p < .10$)。

考察

本研究では、ユーモアと様々な社会心理学的変数との関連性を、従来のユーモア尺度を整理し作成されたユーモア尺度を用い検討した。また、本研究では従来の研究では調べられていなかった変数との関係について、興味深い知見が得られた。

社会的スキル、精神的健康との関連

本研究において、遊戯的ユーモア・センスは社会的スキルが関連し、一方、攻撃的ユーモア・センスとは関連がなかった。この結果は Yip & Martin(2006)の親和的ユーモアと自己向上ユーモアの適応的ユーモアが、関係の開始と個人的開示の社会的コンピテンスと関連があることと一貫する結果であると言える。また、事象のズレなどにユーモアを感じることができることは様々な不適合な社会的状況を客観視することが可能であることを表す。このことはストレスや逆境などの状況において、問題から距離を取り深刻に捉えることをやめさせるという提案と一致する。また、支援的ユーモア行動と社会的スキルの間にも正の関連がみられた。他者からの支援的ユーモアを適切に感知でき、困難な状況にいる他者に適切にユーモアを表出できることは、スムーズな対人的相互作用において重要であると考えられる。

また、攻撃的ユーモア表出行動・支援的ユーモア表出行動ともに精神的健康と関連がみられ、より表出を行う人の方が、精神的健康度が低かった。攻撃的ユーモア表出を行うことには自己や他者を批判・非難することが含まれており、そのための情報を探することで精神的なストレスが日常的にかかるからではないかと考えられる。Kuiper, Grimshaw, Leite, & Kirsh(2004)や Martin

et al.(2003)で指摘されているように、攻撃的ユーモアが敵愾心と関連し、自己卑下ユーモアがネガティブな感情、低い自尊心、低い社会的サポートと関連していることから、攻撃的ユーモアが精神的健康に対してネガティブな影響を持つことが考えられる。また、支援的ユーモア表出を行う目的は、ユーモアを言って他者を励ましたり、嫌なことを笑ったりすることであり、そのため、他者のストレスフルな出来事に共感したり、一度自分の経験した嫌なことを見直す必要があり、そのために精神的なストレスがかかり精神的健康に悪影響を与えると考えられる。ただ、これらの解釈のためには、ユーモア表出行動と精神的健康の間を感受性などの共感を生み出すような心理学的変数が媒介している可能性を検討する必要がある。また、ユーモアとストレス・コーピング、精神的健康には直接関連がみられないという主張もある。上野(2003)は、理由を単にユーモアが好きであるということが重要ではなく、つらい時にユーモア刺激が出せるかどうかが精神的健康に関連するとして説明している。また、ユーモアと精神的健康の関係を男性的特性である Agency と女性的特性である Communion という基礎的パーソナリティ特性が調整している可能性も示唆されている(Kuiper & Sibenik, 2005)。Kuiper & Sibenik は、Agency と Communion の両方が高い水準ならば、ユーモアは精神的健康を促進する効果を持たないことを指摘している。

性別の影響

ユーモア・センスに関して性差がみられた。男性についてはブラック・ユーモアや他者を攻撃するような内容のユーモアを言ったり、聞いたりして楽しむ攻撃的ユーモア・センスが高かった。これは Yip & Martin(2006)や Martin et al.(2003)で報告された結果と同様の結果である。また、女性はもっと笑いたいと思い、言葉遊びやしゃべりなどを言ったり、聞いたりして楽しむ遊戯的ユーモア・センスが高いという結果が得られた。女性は男性より一般的に親和欲求が高いということが指摘されており、また、遊戯的ユーモアを求める人は暖かい親密的な人間関係を求めている、親和要求と思いやり行動と正の相関関係にある(上野, 2003)ことから、女性が男性よりも遊戯的ユーモア・センスが高いという結果が得られたと考えられる。

また、男性と比べて女性は、ユーモアのある友人から生活にも考え方にも影響を受け、また、ユーモアのない友人との関係に満足をしていないということが示された。すなわち、女性は男性よりも友人がユーモアがあるかないかということを重要視している傾向があることが示唆される。これは、女性は幼い頃から笑うということに意識を向けている(Foot & Chapman, 1976)ことから、ユーモアのある人を無意識に察知し、その人との関係をポジティブに捉え、その人から強く影響を受けていると考えられる。

関係満足度と影響の強さとの関連

支援的ユーモア表出行動とユーモアのあると思う友人への満足度について、興味深い知見が得られた。調査対象者は、ユーモアのある友人への満足度とユーモアのない友人への満足度に差異を生じさせていた。つまり、おもしろいと思っている人にはより高い満足感を抱き、そうでない人には対照的により低い満足感を抱いている傾向があるということが明らかとなった。おもしろい友人の方が自らの表出を感知し笑ってくれることが多いと考えられ、これが好意の表れとなり、それによって相手への満足度が高くなると考えられる。また、一人がユーモアを表出すると、コミュニケーションしている相手もそれに応えユーモアを表出することも予測される。互いの考えや態度などをユーモアを通じて伝達し合うことで、不確実性や不安が低減し、その結果、関係満足感や影響を与える度合いが強くなると考えられる。

関西と関東の比較

井上(1984)や井上・昇・織田(1997)では、商人文化である大阪と武士文化であった東京を中心に、関東と関西では笑いやユーモアが異なるとされている。つまり、商いを行う上で協調的雰囲気を出すことが必要な関西では笑いやユーモアを積極的に用い、上下関係を重んじ笑うことが侮辱と捉えられる武士社会の関東では笑いやユーモアが抑制される。

しかしながら、ユーモア・センスにおいて関東への居住年数が多い人と関西への居住年数が多い人の間で比較を行った結果、地域差はみられなかった。中部やその他の地域との差もみられなかったことから準拠集団効果が出たと推測される。そこで、データ取得地別での比較を行った結果、関東のほうが関西よりも遊戯的ユーモア・センスが高いことが明らかとなった。関東地域には関西地域以上に様々な出身地の人が集まっていると考えられ、対人関係を円滑にしたり、コミュニケーションの流れをスムーズにしたりする遊戯的ユーモア・センスが高くなると考えられる。

ユーモアと社会性、情動性

支援的ユーモア表出行動をより積極的に取る方が、

また支援的ユーモア感知行動をより積極的に取る方が、外向性が高いことが明らかとなった。ユーモア表出行動をより積極的に行う人は外向性が高いと考えられ、また、ユーモア感知行動が高いことは、他者がユーモア行動を取った際によりそれを感知し、笑う人であり、そのような人は外向性が高いと考えられる。しかしながら、因果関係についてははっきりとしておらず、外向性の高い人がよりユーモアを表出し、感知を行うことも考えられる。加えて、支援的ユーモア感知行動をより取る人の方が情緒が安定しているということが示された。普段からユーモアをより感知できる人は、心理的な余裕があり、そのため情緒が安定していると考えられるかもしれない。

課題と今後の展望

本研究において、研究結果が一貫していなかったユーモアと社会心理学的変数の関連性について、統一的な見解が示されたといえる。また、性差や地域差とユーモアとのより詳細な関連が示された。加えて、友人関係への影響についてもユーモアがあることのポジティブな影響がみられた。

本研究では、現在までに指摘されてきたユーモアと基本的な社会心理学的変数の関連を、整理された尺度を用いて検討することになった。そのため、本研究で扱った変数とユーモアの詳細な関連については検討を行っていない。今後は本研究で示された個々の結果について、従来の研究結果を参考にしながら、より詳細な検討を加えてゆく必要がある。また、本研究で扱うことができなかったその他の関連が指摘されている変数についても、本研究で用いたような従来の尺度を整理した尺度を用いて、改めてその関連性を検討する必要があると思われる。加えて、今後はユーモアと笑いという行動的側面との関連についても検討してゆきたい。

引用文献

- Abel, M. H. (1998). Interaction of humor and gender in moderating relationships between stress and outcome. *The Journal of Psychology*, 132, 267-276.
- Berscheid, E., Snyder, M., & Omoto, A. M. (1989). The relationship closeness inventory: Assessing the closeness of interpersonal relationships. *Journal of Personality and Social Psychology*, 57, 792-807.
- Buhmester, D., Furman, W., Wittenberg, M. T., & Reis, H. T. (1988). Five domains of interpersonal competence in peer relationships. *Journal of Personality and Social Psychology*, 55, 991-1008.
- Foot, H. C., & Chapman, A. J. (1976). The social responsiveness of young children in humorous situations. In A. J. Chapman & H. C. Foot (Eds.), *Humor and Laughter: Theory research and application*. London: Wiley.

- 井上 宏 (1984). 笑いの人間関係 講談社
- 井上 宏・昇 幹夫・織田正吉 (1997). 笑いの研究 —ユーモア・センスを磨くために— フォー・ユー
- 菊池章夫 (1988). 思いやりを科学にする —向社会行動の心理とスキル— 川島書店
- Kuiper, N. A., & Borowicz-Sibenik, M. (2005). A good sense of humor doesn't always help: Agency and communion as moderators of psychological well-being. *Personality and Individual Differences*, 38, 365-377.
- Kuiper, N. A., Grimshaw, M., Leite, C., & Kirsh, G. (2004). Humor is not always the best medicine: Specific components of sense of humor and psychological well-being. *Humor: International Journal of Humor Research*, 17, 135-168.
- 牧野幸志 (1997). ユーモア行動の構造に関する研究 広島大学教育学部紀要 第1部(心理学), 46, 41-48.
- 牧野幸志 (1998). ユーモア・センス尺度の作成 広島大学教育学部紀要 第1部(心理学), 47, 37-46.
- Martin, R. A., Puhlik-Doris, P., Larsen, G., Gray, J., & Weir, K. (2003). Individual differences in uses of humor and their relation to psychological well-being: Development of the humor styles questionnaire. *Journal of Research in Personality*, 37, 48-75.
- 宮戸美樹・上野行良 (1995). 関西と関東のユーモア(1) 日本社会心理学会第36回大会発表論文集, 480-481.
- 中川泰彬・大坊郁夫 (1996). 日本語 GHQ 精神的健康調査票手引き —日本語 GHQ 短縮版解説— 日本文化科学社
- Nezu, A. M., Nezu, C. M., & Blissett, S. E. (1988). Sense of humor as a moderator of the relation between stressful events and psychological distress: A prospective analysis. *Journal of Personality and Social Psychology*, 54, 520-525.
- Thorson, J. A., & Powell, F. C. (1994). Depression and sense of humor. *Psychological Reports*, 75, 1473-1474.
- 上野行良 (1992). ユーモア現象に関する諸研究とユーモアの分類化について 社会心理学研究, 7, 112-120.
- 上野行良 (1993). ユーモアに対する態度と攻撃性及び愛他生徒の関連 心理学研究, 64, 247-254.
- 上野行良 (1996). 「笑わせる」ことによる対人操作 対人行動学研究, 14, 30-32.
- 上野行良 (2003). ユーモアの心理学 —人間関係とパーソナリティ— サイエンス社
- 和田さゆり (1996). 性格特性用語を用いた Big Five 尺度の作成 心理学研究, 67, 61-67.
- Yip, J. A., & Martin, R. A. (2006). Sense of humor, emotional intelligence, and social competence. *Journal of Research in Personality*, 40, 1202-1208.
- Ziv, A. (1984). *Personality and Sense of humor*. New York: Springer Publishing Company. (高下保幸(訳)(1995). ユーモアの心理学 大修館書店)

Relations between humor and social psychological variables

Tadakuni TANI (*Graduate School of Human Sciences, Osaka University*)

Ikuo DAIBO (*Graduate School of Human Sciences, Osaka University*)

The purpose of this study is to hand in the fundamental data about the relations between humor and social psychological variables with using humor scales covers traditional humor studies and scales. University students completed the questionnaire consisted of sense of humor, humor behavior, social skills, mental health, extroversion, emotional instability and, satisfaction level and incidence level for a friend with sense of humor and a friend with no sense of humor. Results showed there are significant positive relation between supportive humor behavior and social skill, and significant negative relation between humor behavior and psychological well-being. And the more the score of supportive humor behavior rose, the more the discrepancy between satisfaction level for a friend with sense of humor and that for a friend with no sense of humor expanded. Finally, a perspective of this research was discussed.

Keywords: humor, social skills, mental health, friendships, area comparison.